



2026

# 学校だより **本荘** Smile

令和7年度 第55号  
令和8年3月23日  
熊本市立本荘小学校  
校長 西川 英臣

## 3月19日は、記念すべき第150回卒業証書授与式でした。

先週3月19日(木)は、本荘小学校の記念すべき第150回卒業証書授与式でした。そして、私にとっても校長として最後の卒業式になりました。12人の6年生は、本当に立派に卒業していきました。幼少期に熊本地震を経験し、コロナ禍の中で入学した小学校生活。入学式ができず、入学を祝う会が6月になってやっとできたこともたちです。地震やコロナウイルスに負けずに育った立派な子どもたちです。一人一人が卒業証書もらった後に、自分の「志」(夢よりさらに具体的で、自分の以外の人のためになろうとする目標)を力強く語り、本荘小を旅立っていきました。私が赴任した時はまだ2年生、5年間を共にしたかわいい卒業生たちです。

校長式辞では、「大人になるための二つのお話」をさせてもらいました。一つ目は、「志の授業」で子どもたちに「人の生き方」を教えてくださいました岩山 泉先生の言葉。もう一つは、私の父の話です。

詳細は、式辞全文を読んでいただければと思いますが、「努力を続けること」と「人を大切にすること」を伝えています。詳細は「校長先生の虫眼鏡」で読まれてください。

校長式辞は、卒業生に送る最後の饞(はなむけ)の言葉です。ですので、卒業生と式に参加されたみなさんに、校長からのメッセージとして伝えたかったのです。

12人の卒業生は、私の最後の卒業生なのです。これからも応援していきたいと思います(校長)

### 校長先生の虫眼鏡 「第150回卒業証書授与式 校長式辞」

式辞(原稿のままです)

厳冬と呼ばれた季節も終わりを告げ、寒さに耐えた校内の花々が柔らかな光の中で輝きを増しております。

本日、この佳き日に、ご来賓並びに保護者の皆様のご臨席を賜り、記念すべき第百五十回卒業証書授与式を挙行できますこと、心より感謝申し上げます。

さて、ただいま卒業証書を手にした十二人の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。その証書は、六年間皆さんが懸命に学び、心身ともに大きく成長した証です。そこには、皆さんの成長を願い、見守ってこられたご家族の深い愛情、慈しみ育てた先生方の熱意、そして地域の方々の温かな眼差しが込められています。支えてくださった多くの方々への感謝の心を忘れず、その証書をいつまでも大切にしてください。

皆さんはこの六年間、学習に運動に本当によく励みました。特にこの一年間は最高学年として、その重責に臆することなく、何事にも誠実に取り組んでくれました。

朝のボランティア活動では常に率先して行動し、暑い夏の日も、一年生と共に汗を流して畑の草取りをしてくれましたね。運動会では、高学年のリーダーとして表現運動「心を一つに」を創り上げました。少人数であっても、これほどまでに完成度の高いパフォーマンスができるのだという自信と誇りを、後輩たちの心に刻んでくれました。

最上級生としての重責を乗り越え、みんなのために尽くす大切さを背中では語る皆さんの姿は、在校生にとっての憧れであり、誇りでした。最後までやり遂げようとするその真摯な姿は、在校生のみならず、私たち教職員や地域の大人たちにも大きな感動を与えてくれました。伝統ある本荘小学校の卒業生として、誠にふさわしい立派な姿でした。心から感謝します。(裏面へ)

皆さんは四月から中学生になります。中学校生活は、大人になるための準備期間です。誰かが大人にしてくれるのではありません。自分自身の力で、自分を大人へと育てていくのです。そのために大切にしてほしい二つのことをお話しします。

一つ目は、「志を高く持ち、その実現のために努力を続けること」です。

皆さんは以前、ご来賓として本日もご臨席いただいております岩山 泉先生から「志の授業」を受けましたね。岩山先生は「志や使命感に失敗はない。あるのは成功か、さもなければ挑戦中である」と教えてくださいました。たとえ困難に直面しても、成功するまで挑み続ける姿勢こそが大切なのです。

また「今は未来である」とも仰いました。今取り組んでいることは、すべて未来の自分に繋がっています。今、目の前のことに一生懸命向き合うことの尊さを、皆さんは学びました。岩山先生のお言葉である「一積最短善(いっせきさいたんぜん)」。一つひとつを積み重ねることこそが、目標への最短で最善の道です。今この瞬間の努力が、皆さんの人生を切り拓いていくのだと信じてください。

二つ目は、「人を大切にする」ということです。

このことを伝えるにあたり、誰のお話をしようか大変悩みました。実は、皆さんの卒業式は、私にとっても校長として最後となる卒業式です。そこで今日は、私の父の話をさせてください。

私の父は、ごく普通の会社員でした。ガス会社のサービスエンジニアとして働いていたため、背広姿を見せることは滅多にありませんでした。子供の頃の私は、ネクタイを締めて働く人の方が立派に見え、そうでない父をどこか素直に敬えずにいました。父は厳格で頑固な性格もあり、私は尊敬の念をあまり抱かないまま大人になってしまった……。今ではそう後悔しています。

しかし、私が以前勤めていた学校で、かつて父の部下だったという保護者の方に出会いました。その方が語る父の姿に、私は深く驚かされました。

「校長先生のお父さんは、本当に部下思いの方でした。私が若くて未熟だった頃、いつも私を助け、上司に叱られそうな時は、身を挺して一緒に頭を下げてくれました。今、熊本市内に都市ガスが整備されているのは、お父さんたちと一緒に私たちが懸命に働いた証です。それが私の誇りなんです」

私の知らない父の姿がそこにありました。自分以外の誰かのために尽くし、「人を大切にする」父の生き方は、今の私のお手本となっています。

父が亡くなった後、遺された日記を開くと、そこには自分のことではなく、孫のこと、息子夫婦のことなど、家族を思いやる言葉が亡くなる直前まで綴られていました。「人を大切にする」ということは、一番身近な「家族を大切にすること」から始まります。皆さんのご家族も、私の父がそうであったように、皆さんのことを何よりも大切に想ってくださっています。皆さんが気づいている以上に、深い愛情を注いでこられました。どうか皆さんも、家族を大切に想える人になってください。そして、今以上に自分以外の誰かを思いやる、素敵な大人になってくれることを心から願っています。

保護者の皆様、本日はお子様のご卒業、誠におめでとうございます。

皆様が注いでこられた深い愛情と、ご家庭の温かな育みが、一人ひとりの豊かな個性となり、六年の歳月を経て、本日このように立派な卒業生として結実いたしました。

大切なお子様をお預かりして六年間、本校では「なかよく・かしこく・たくましく」の校訓のもと、「『あいうえお』いっぱいの子どもの育成」を目指し、職員一同全力で教育活動に邁進してまいりました。その間には、熊本地震の傷跡や新型コロナウイルスへの対応など、決して平穏な道のりばかりではありませんでした。皆様にとっても、ご苦労の多い日々であったと拝察いたします。そのような中であっても、皆様から寄せられた絶大なるご理解とご協力は、常に私たちの大きな支えとなりました。これまでの温かいご支援に心より感謝申し上げます。

また、ご来賓の皆様、本日はご多用の中をご臨席賜り、誠にありがとうございました。

ご覧いただきました通り、本荘小学校の卒業生は、私たち全職員にとって自慢の子どもたちです。今日の佳き日を迎えられましたのも、ひとえに地域の皆様の温かいお力添えがあったからこそです。子どもたちと共に、深く感謝申し上げます。

結びとなりますが、卒業生の皆さん、これからも互いを慈しみ、思いやりの心を育みながら、自らの手で輝かしい未来を切り拓いていってください。先生たちは、いつまでも、いつまでも皆さんの味方です。

皆さんの限りない飛躍と、幸多き人生を心から祈念いたしまして、名残は尽きませんが、式辞といたします。

令和八年三月十九日

熊本市立本荘小学校長 西川 英臣